

青年期と中年期における対人恐怖的心性の比較 — 自尊心、タイプA行動パターン、攻撃性からの検討 —

津 田 佳 子

I. 問題と目的

対人恐怖は日本において「森田神経症」の一病型として古くから知られており、精神科臨床の中では日常的な病態である。また、その病態は青年期に頻発し、かつ日本人の対人関係様式をよく反映していることなどが、これまで多くの研究者によって指摘されてきた（近藤，1960；加藤，1964など）。現代社会においても、人間関係は人々にとって主要な関心事の一つである。さまざまな人間関係の中で出てきた問題を、当然のこととして受けとめ、割り切って受け流すことができれば問題はない。しかし、ときにはそのような対人関係にこだわり、相手の存在が気になり、自信を失い、自分は価値がないのではないかと思ひ悩み、自分の性格や存在そのものに関わる問題として深刻に考えてしまう場合がある。そして強度の対人不安のために、社会生活を営むことが困難になるのである。

笠原ら（1972）の対人恐怖の分類において、「正常者の青年期という発達段階において一時的に見られるもの」という段階が設定されており、発症に直接結びつかないまでも、青年期には潜在的に対人恐怖的心性を有するものが多いと思われる（木村，1983）。本研究では、人見知りや過度の気遣い、対人緊張など、一般の健康人にも認められる対人恐怖的傾向を対人恐怖的心性と呼ぶことにする。

これまで、対人恐怖的心性に関する一連の実証的なアプローチは、常にその対象は青年期に限定されており、青年期的心性との関連で語られてきている。中年期の対人恐怖的心性を調べることなく、青年期に対人恐怖的心性が高いと断定されているため、その実際を実証的に明らかにする必要がある。そこで、本研究では、探索的に調査を進めて、青年期と中年期の対人恐怖的心性を比較し、その相違点を明らかにしていく。青年期と中年期の対人恐怖的心性の特徴を調べていくことを目的として、自尊心、タイプA行動パターン、攻撃性の視点から検討する。

II. 方法

【調査対象】青年群は、国立N大学の大学生144名（男性65人、女性79名）を対象に配布調査。年齢の幅は18歳から25歳。中年群は、30歳から49歳までの男女205名

（男性96名、女性109名）を対象に、配布あるいは郵送による調査。職業・所属は会社員85人、公務員5人、教師1人、医療従事者44人、自営8人、パート32人、主婦25人、その他5人であった。

【質問紙】①対人恐怖尺度：永井・岡田（1987）、永井（1991）の「対人関係尺度」42項目に、小川（1981）の「対人関係質問票」にある6項目を加えた48項目。7件法で測定。②対人恐怖懸念尺度：対人恐怖尺度で答えた自分の現状を、どの程度「気にしているか」を対人恐怖尺度48項目それぞれに対して尋ねる。5件法で測定。③自尊心尺度：Rosenberg（1965）の作成したSelf-esteem scaleの邦訳版（山本・松井・山成，1982）10項目。7件法で測定。④タイプA行動パターン尺度：前田（1985）の「A型傾向判別表」12項目。3件法で測定。⑤攻撃性尺度：「EPPS性格検査」の邦訳版（肥田野・岩脇・杉村・福原，1970）から「攻撃」の特性を構成する9項目と、「矢田部ギルフォード性格検査」（辻岡，1982）から「攻撃性」の性格特性を構成する10項目を組み合わせる。5件法で測定。

III. 結果と考察

1. 各下位因子の検討

各尺度について因子分析を行った結果、以下の構造が得られた。①対人恐怖尺度：「対人行動の困難さ」「被害的対人意識」「加害的対人意識」「二者関係における緊張感」「自己の不安定さと劣等感」「大勢の人の前での行動の困難さ」「自己統制の弱さ」の全44項目、7因子。②タイプA行動パターン尺度：「競争性」「時間的切迫感・熱中性」の12項目、2因子。③攻撃性尺度：「対人攻撃性」「正当性の主張」「刺激性」「衝動性」の19項目、4因子。

対人恐怖尺度について世代別の因子分析を行ったが、因子負荷量の大きい項目は青年群も中年群もほぼ同じであったため、青年群と中年群の対人恐怖的心性の構造に違いはないと考え、両群をあわせた全体の因子分析結果を採用した。しかし、本研究で使用した対人恐怖的心性尺度は、青年期の対人恐怖症者の訴えをもとに作成したものであり、中年期の対人恐怖的心性を包括できていない可能性が考えられる。今後は、中年群の対人恐怖症者の訴えをもとに、各発達段階に適した尺度を構成し、

検討することも必要である。

2. 対人恐怖的心性の量的な世代差の検討

全尺度得点について、性別（男・女）×世代（青年群・中年群）の分散分析をおこなった結果をもとに、特に対人恐怖尺度についてとりあげて考察した。対人恐怖尺度総得点においては、世代の主効果が認められ、青年群が有意に高い得点を示したことから、対人恐怖的心性は中年期より青年期に高いことがわかった。笠原（1977）は、対人恐怖の経過について「10歳代後半から20歳代前半の青年男女を悩まし続けるが、20歳代後半になると次第に苦悩の色を少なくしてゆき、30歳前後にいたると、不安がなくなってしまうわけではないが、対人場面での不安を何とか乗り越えて社会生活に参入し始める」と述べている。すなわち、本研究の結果は、従来から述べられてきたことを支持する結果となったと言え、臨床的に言われてきたことが数量的に確認された。

次に、対人恐怖的心性の具体的な特徴として、対人恐怖尺度の下位尺度について検討した。本研究では、すべての対人恐怖下位尺度得点において、世代の主効果が認められ、青年群が有意に高い得点を示した。対人恐怖的心性について、行動面と意識面、二者関係と大衆の面前、加害的対人意識と被害的対人意識といった、その内容に関わらず、青年群が高い値を示した。つまり対人恐怖的心性のすべての点で、青年群が高いことが示唆された。

対人恐怖懸念尺度についても対人恐怖尺度と高い相関を示し、対人恐怖的心性の高いものは、それを懸念する程度も高いという結果になった。これについても青年群が有意に高く、青年は対人恐怖的心性が高く、またそれを気にしている様子が明らかになった。

3. 対人恐怖的心性と他尺度との関係

全尺度得点について世代別に相関係数を出した結果をもとに、特に、対人恐怖的心性と他尺度との関係についてとりあげて考察した。対人恐怖的心性と自尊心との関係は、世代に関わらず、対人恐怖的心性が高い者は自尊心が低いことが示された。しかし、自尊心とタイプA行動、自尊心と攻撃性との相関に世代差があり、青年期と中年期では、自尊心の高さを左右する要因が違ふと考えられたため、対人恐怖的心性と自尊心の関連性の意味するところも、青年群と中年群とでは異なっていることが考えられる。つまり、中年期の人々が感じる時間的切迫

感や熱中性は、生活の充実感ひいては自尊心の高揚に結びついており、対人関係を持つ相手の人数に関わらず、円滑に人間関係を結ぶことが、仕事を精力的にこなし、生活の充実感を得て自信につながっていくと考察される。

一方、青年群では、対人恐怖的心性が低くても、生活の忙しさや物事への熱中とは関わりがないことを意味しており、まだ毎日社会に出て働く必要のない学生たちは、対人恐怖的心性が高くても、それならば対人関係を避けて通ることも可能であるということを示しているものと思われる。青年期の対人恐怖的な心性はもっと自己の内面に向かっており、現実の問題より自分自分の中での葛藤が青年の心を占めているのではないかと考えられる。

対人恐怖的心性とタイプA行動の関係については、タイプA行動の二つの下位因子のうちのどちらか一方に高い相関が見いだされ、下位因子の得点がタイプA行動総得点を左右している。タイプA行動の第1因子「競争性」が世代に関わらず高く、対人恐怖的心性の高い者は、他人と競争する気持ちを持ちやすく、気性が激しい様子が明らかになった。

対人恐怖的心性と攻撃性との関係については、「対人攻撃性」と「衝動性」が対人恐怖尺度総得点と正の相関を示しており、青年群、中年群ともに対人恐怖的心性の高い者は、自分と反対の意見の人を攻撃したり、自分の都合が悪くなると他の人を責めるといった対人攻撃性が高く、気が短くて衝動的であることが明らかになった。このうちの衝動性については、対人恐怖尺度の下位因子と重なる項目もあり、対人恐怖症者の連続線上にある対人恐怖的心性をもつ者が、衝動コントロールに欠け、不安定であることは自明のことである。一方、「対人攻撃性」が高いという結果からは、対人恐怖的心性の背後には、人への攻撃性が潜んでおり、対人批判を持つがゆえに、人間関係を壊さないことを意識するとき、対人関係を恐れ、対人関係に必要な以上にとらわれてしまうということが明らかになった。

以上のように、対象を中年期に広げ、対人恐怖的心性の特徴を明らかにしてきたが、より詳細に対人恐怖的心性の世代差を明らかにするために、対人恐怖的心性の因子ごとの量的な差を、横断的に、さらに縦断的に検討することが必要である。また、中年期の対人恐怖症者の訴えをもとに尺度を構成し、検討してみることも今後の重要な課題であろう。